

令和5年度 第3回 不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会（オンライン）

意見交換要旨

- 1 日 時 令和5年2月8日（木） 10：00～12：00
- 2 場 所 県庁西庁舎 108号会議室（Web開催）
- 3 出席者 荒井座長、甘利委員、市川委員、岩田委員、直井委員、近藤委員、三輪委員、赤羽委員
- 4 内 容
 - (1) 開会
 - (2) あいさつ（こども若者局長 高橋 寿明）
 - (3) 報告・意見交換
 - ① 子ども・保護者と学校・市町村を結ぶきっかけづくりのためのコミュニケーションシートについて
 - ・「コミュニケーションシート（最終案）」について
 - ・意見交換
 - ② 学びの多様化学校等、多様な学びの場の今後の方向について
 - ・本懇談会における学びの多様化学校設置検討結果のまとめについて
 - ・意見交換
 - (4) 御礼のあいさつ（教育次長 曾根原 好彦）
 - (5) 連絡事項
 - (6) 閉会

【意見交換要旨】

① 子ども・保護者と学校・市町村を結ぶきっかけづくりのためのコミュニケーションシートについて

荒井座長：本日は、意見交換のテーマが2つあります。まず、「子ども・保護者と学校・市町村を結ぶきっかけづくりのためのコミュニケーションシート」について、意見交換をしていきます。

前回の懇談会后、市川委員、岩田委員が、居場所関係者やフリースクール運営者、保護者の皆様とコミュニケーションを取っていただき、事務局原案に対するご意見を頂戴しました。

その内容を事務局で検討いただき、今回最終案を提案させていただいています。事務局から説明をお願いします。

事務局：今、荒井座長からもご説明がありましたが、11月28日の第2回懇談会が終わったところで、市川委員と岩田委員を中心に居場所関係者の皆様、フリースクール運営者の皆様、保護者の皆様に項目や文言の修正をしていただきました。事務局にご提出いただいた案を踏まえて作成しましたお手元の資料1をご覧ください。ご協力ありがとうございました。

市川委員、岩田委員中心に取りまとめていただいたものを基に、第2回の原案から事務局で変更した4点をご説明いたします。

まず、シート名を『子ども・保護者と学校を結ぶ「きっかけづくり」のためのコミュニケ

ーションシート』とご提案いただきましたが、市町村教育委員会の教育支援センター等も関わっていただき、市町村教育委員会にもコミュニケーションに加わってもらいたいということもあり、「子ども・保護者と学校・市町村を結ぶきっかけづくりのためのコミュニケーションシート」というタイトルにさせていただきました。委員の皆様から「きっかけ」というキーワードを頂きましたので、事務局でも「きっかけ」という言葉を重要なキーワードにしたいと思っております。

2点目です。シートが、教育委員会、教育関係者、居場所運営者、フリースクール運営者等の協力で作成されたものであるということを、シートの最後に明記させていただいております。

それから、子どもと保護者の思いについては、選択式ではなく記述式にさせていただいております。その記述項目の中に、PTAについて記述できるものを事務局で入れさせていただいております。

この後、委員の皆様には、シートの構成や項目、文言について、ご意見をいただきたいと思っております。なお、荒井先生の研究室の学生さんにご協力いただき、デザインを作成させていただいております。この後、荒井先生から、デザインをご紹介いただければと思っております。事務局からは以上です。

荒井座長：ありがとうございます。市川委員、岩田委員からもコメントをお願いします。

市川委員：ありがとうございます。前回岩田委員とともに発言させていただき、当事者に近い立場にいる居場所・フリースクールの運営者交流会のメンバーを中心に、子どもや保護者にも話を聞きながら意見を出させていただきました。担当の心の支援課や荒井先生とも協力させていただきながら提案させていただきました。

これは、私たちが子どもの最大かつ最善の利益を保障するためのものとしての視点で考え、子ども・保護者、並びに家庭が主体になって活用するものという目線で託すということで、提案しました。

見た目は、荒井先生の方で学生さんと共に柔らかいものにしていただき、とても嬉しく思っています。すごく考えていたのが、中立の立場の人が配布するということも想定して、例えば不登校支援コーディネーターやスクールカウンセラー、それから教育支援センターの方が仲介として、学校・行政との間に立って配りやすいものや、もちろん、学校にとっても、しなければならないとか、仕事が増えたという思いではなくて、いわゆる不登校の子どもに心を向きやすくするツールとして活用してほしいという願いで書いています。その点についても、我々の目だけなので、皆さんの目を通して見ていただければ大変ありがたいと思っています。

これと同時に、「活用するにあたって」ということで、学校関係者並びに不登校の子どもたちや家庭を応援するような関係者に向けて、2つに分けて、活用するにあたって注意してほしいことについても、提案させていただいておりますので、これも、後ほど紹介させていただければと思います。

岩田委員：市川さんとともにフリースクールの仲間やお母様方にお話を聞きながら、このコミュニケ

ーションシートの修正をやらせていただきました。今、市川さんが言われたように、これがきっかけ作りのシートであることがまず大事で、そのためには、こういったシートがあるということを先生方が皆さんご存知であること、さらには、間に入っていただくような不登校支援コーディネーターやSSWの方たちがこういったものがあることで、きっかけになるということを理解してくださっていることが重要ではないかと思っています。このシートの使い方がすごく重要であると思いますので、ここから先の運用にあたっては、また改善を加えていく作業が必要になってくるかと思っています。

荒井座長：ありがとうございます。お手元にWord版の資料があると思いますが、こちらは自治体の状況や保護者の皆様の思いを踏まえて、加筆修正が可能な形として活用していただくために、あえて編集可能なものをご用意しました。

それを前提としながら、コミュニケーションシートの全体像をイメージしていただくためのPDF版の資料を作成しました。こちらは、本学の学生に協力してもらい、全体で5ページ構成のデザインとしました。

改めてシートについて私からも説明させていただくと、現場の困り感、ここでの現場とは学校だけではなく、保護者や当事者、支援者の方に色々な困り感があることを前提としながら、対話のきっかけ作りとして活用できるものという趣旨で作成しました。これについては、シートの中にも明記しております。

なお、シートの末尾にも記載しましたが、今回のシートのアイデアは、第1回目の時にゲストとして登壇いただきました多様な学びプロジェクトの関係者の皆様の活動の成果を参照し、最大限活用させていただいている点も改めてご確認ください。

以上です。他の委員の皆様からもコメント等いただけますでしょうか。

直井委員：すごくわかりやすいシートで、色々改善点も含め説明ありがとうございました。この後の議論の方がよかったかもしれないのですが、感想も含めてということで、今本当に思ったことをお話ししたいと思ったのが、前提となる自分たちが意見を述べてもよいという雰囲気をつくる、このシートをどう活用するかということもそうなのですが、やはり先生と生徒、大人と子どもといった立場があることが今ほとんど多くて、子どもたちが自信をもって私はこうしたいんだと言いにくいと日頃思うのですが、自分が主体的に意見を言っているんだということを、このシートを通じてわかるということが一番大事だとすごく感じました。

この後の議論につながればよいと思うのですが、このシートが出てくると逆に今度は保護者に強制感が出て、何が出てきても同じことだと思いますが、そういう中で子どもが意見を述べるとか、学びの主体になるというか、今後の人生すべてですが、決断の主体は自分にあるということを、学校というものを通して考えるきっかけになるだろうということをシートの活用法の議論の中でできたらよいと思いました。

荒井座長：ご指摘のとおり、これは「きっかけ」としての対話ツールです。残念ながら、学校関係者と保護者との間で分かり合えない部分や情報共有できていなかった部分がある中で、対話の場を設けることで、互いの困り感に初めて気付く部分があると思います。

近藤委員：今のご意見と重なるのですが、不登校の現状について校長先生方と話をする、何のコンタクトも取れない方がやはり多いです。これが、コンタクトのきっかけになればということ、荒井先生がおっしゃった後者の部分が重なるのですが、このコミュニケーションシートの最初がよいのか後がよいのかわからないのですが、これは学校に来なさいとか、行かなきゃいけないんだよということではないというような表記、安心してこれを書ける、保護者もお子さんも、そういう表記が最初のところで、別にガイドラインを作ってマニュアルを読んでこれというのでなくて、これは安心して言えるのだと、学校に対しても教育委員会に対しても、その他の大人に対しても物を言えるのだという表記があればと思います。

私は教育委員会の立場なので堅くなってしまうのですが、例えば今文部科学省では、学校へ必ずしも行かなくてもよい、どこで学んでもよいとされているので、その時の学びの目安として、きっかけになるように、これを皆さん書いてもらえませんかと保護者も子どもも安心して、ここに書けるような 標記があるとよいかと思います。

甘利委員：今の意見に重なるのですが、やはり学校は親にとってのものすごく敷居が高いです。朝の欠席連絡も何と言おうか、ものすごく悩みながら電話をかけています。お母さんたちは、本当にそこで1日のエネルギーを使っているような状況であると思います。本当に辛いお母さんたちがたくさんいると思うのですが、やはりこのシートが、敷居が低い、使いやすいものになると思います。

そして、コミュニケーションシートについて、荒井先生と学生さんと一緒に作ってくださったシート、市川委員と岩田委員がご尽力いただいたシートは、とてもよいです。すごく簡素化されていて、わかりやすいシートになっていると思います。ピンク色のすごく優しい色で出されているのがとてもよいです。まず色覚から入って柔らかな気持ちにもっていきながら、このシートに取り組めるということは、お母さんたちにとってもすごくプラスになると思います。

荒井座長：ありがとうございます。デザインしてくれた学生にとっても励みになるコメントをありがとうございます。

赤羽委員：本当にご尽力いただき、作り直していただきありがとうございます。私も拝見した時に、非常に柔らかさを感じています。これが本当に対話を始めるきっかけ作りになればよいと思っています。

ただ、やはり今までのお話の中にもありましたように、これをいかに学校側、職員も含めてですが、これを知って、理解して、実際に活用していかないと、どんなによいものであってもその効力は発揮できないと思います。私どもが議論を重ねてきた願いも含めて、これをいかに発信して、使っていけるようになるのかというところが次の大事な部分ではないかと思います。

荒井座長：4月以降にこちらがリリースされた際は、色々な反応があると思います。使い勝手がよいということもあれば、そうでないパターンも当然あり得ます。そこは事務局でもきちんと吸収していただき、引き続き改善を加えていくものであるという共通認識をもっておけたらと

考えています。

三輪委員：今、話があった実際に使ってみてどうかということの評価・改善していくという仕組みをまた来年度以降、県教育委員会で作っていただければありがたいと思っています。

もう1点、シートが学校の敷居を低くするという観点からですが、このシートがどこに置かれるのかということ考えた方がよいと思います。県のホームページの見やすいところに載るのではないかと思うのですが、それだけではなくて、教育委員会や学校、市町村が設置している教育支援センター、いわゆる公的機関の中の目がつくところから発信できるような、そういう紙ベースのものもあってよいかと思っています。

敷居が低くなるようにということであれば、敷居が高いと思われるところに広く置かれていて、目に届くようにしておくことも一つの方法かと思いますので、そんなことも含めて検討していただければと思っています。

現時点でこのことを承知している教育委員会あるいは校長もいれば、そうでない校長もかなりいると思っていますので、その辺をどのように4月のスタートにあたって伝えていくのか、また人事異動もありますので、そうしたことも含めて、検討いただければありがたいと思います。内容については、大変丁寧に作られて、また温かいものになってきているということで、大変賛同しますので、よろしくお願いします。

荒井座長：ありがとうございます。今後の運用や広報の仕方については、後程事務局からもご回答いただきたいと思います。

市川委員：三輪先生のご意見に追加してですが、置く場所として我々の中でも少し話題になったことがあり、今のご意見に加えて、フリースクールや、不登校支援コーディネーター、SSWも紙ベースで持っていて、後の議論にはなりますが、必要なところに置ければよいということと、もう一つは、やはり我々の中で、貰うか貰わないかとか、書く書かないか、相談するしないということについては、子どもや保護者、家庭が決めていけるようなことや、お守りとして持っておくだけでも安心するような保護者がいるのではないかということも出てきました。

後は、話し合いの場で書かなくても、レジュメとして話し合う時にそこに置いて、このことについてどうしましょうかというようなガイドにもなるのではないかという意見も出ました。

荒井座長：ありがとうございます。ご指摘の点は、学校関係者のみならずフリースクールや居場所関係者の方々も、どのような活用方法がよいか、好事例を積み重ねていくことも大切だと思いますので、皆様からもフィードバックをお願いできればと思います。

ここで、もう一つの論点と言いますか、先程、市川委員からコミュニケーションシートを活用していく上でのガイドのご提案をいただきました。これについては、今後、事務局中心に検討を進めていきたいと思っておりますので、ご了解ください。

近藤委員：「はばたき」との関連付けも当然会議の中で出てくると思うのですが、困り感をもっている、あるいはどこへ相談してよいかわからない、それすら考えていない方のところまでこれを届けることになる、ぜひ「はばたき」を関連付けながら進められるような方法も考えておい

ていただければと思います。

荒井座長：ありがとうございます。はばたきのVOL.1とVOL.2、そして、今回のコミュニケーションシートを、ある意味「三種の神器」的なものとして位置付けて、まず、きっかけ作りとして「コミュニケーションシート」の活用を通じて対話の機会を設け、そこで関係者間の関係性が構築されることによって、次の一步をどのように踏み出すかを考えていくことができると思います。

例えば、2つの「はばたき」を参照しながら、子どもの出席や評価のあり方について情報共有していくという活用方法もあるかもしれません。事務局でもご検討いただいて、それぞれの教育委員会あるいは教育事務所で活用方法について検討・共有していただきたいと思います。シートの扱いについて、事務局として考えられていることをご説明ください。

事務局：心の支援課長の召田です。今後の予定ですが、先程来お話がありました通り、校長会や各市町村への周知等も必要だと考えているところです。年度入ったところで、できるだけ早い段階でこの活用を始めたいと考えているところです。

なお周知に関して、先程「はばたき」の話もありましたが、ある不登校支援の関係者の方から「はばたき」を知らない方がまだいらっしゃるとお聞きしています。評価のことや出欠席のこと等「はばたき」に記載させていただいてるところなのですが、まだ知らないというご意見もいただいているところです。

機会あるごとに、周知を広めていきたいと考えているところなのですが、こちら側から周知することには限界もありますので、ぜひまた支援者の方々も一緒にその周知についてもご協力をお願いしたいと思います。

荒井座長：年度前後で人事異動等もありますので、年度内に公表よりは、新年度以降の新体制でご理解いただく方がよいという意見も頂いておりましたので、それを踏まえてご対応ください。

② 学びの多様化学校等、多様な学びの場の今後の方向について

荒井座長：市町村対象に学びの多様化学校等に関するアンケート調査を実施しておりますので、結果を事務局からご報告いただき、ご意見をいただきます。

事務局：アンケート結果についてですが、令和5年12月18日から令和6年1月15日まで、義務教育課が県内77市町村に行いました意向調査の結果となります。第2回の懇談会でもアンケートを取るということでお話しさせていただいたと思いますが、(4)のアンケート結果をご覧いただければと思います。「学びの多様化学校の設置に向けた検討をしたい」と答えた市町村については1市町村。「夜間中学と学びの多様化学校の併設の設置に向けた検討をしたい」と答えた市町村は3市町村。「夜間中学と学びの多様化学校の併設、夜間中学と学びの多様化学校併設を含め多様なニーズを包括した柔軟な学校の設置に向けた検討をしたい」とお答えいただいた市町村は8市町村でございました。

合わせまして、次の7ページの資料3をご覧ください。資料3につきまして、令和5年度不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会における学びの多様化

校設置検討結果について、まとめの案として事務局案を示させていただきました。少しこちらで説明を加えさせていただければと思います。

9ページをご覧ください。9ページから11ページにかけては、検討の経過とまとめを記載いたしました。第1回の懇談会で頂いた学びの多様化学校についての委員の皆様からの主なご意見、10ページには第2回懇談会での夜間中学と学びの多様化学校併設についての主なご意見等を記載させていただいております。11ページには、2回の議論のまとめとして、まず①学びの多様化学校の県内の設置検討、それから②市町村への国や県の支援メニュー等の提示、③夜間中学と学びの多様化学校の併設も含めたインクルーシブでフレキシブルな学びの場の検討の3点について、まとめとして記載をさせていただいております。

最後の4については、今後の方向性を記載させていただいております。事務局としては、方向性について3点キーワード案を記載させていただきました。①学びの多様化学校の設置促進、②学びの多様化学校の設置検討の意向がある市町村との共同、③インクルーシブでフレキシブルな多様な学びの場の在り方の検討といったことを今後の方向として記載していきたいと思っております。議論のまとめと今後の方向性につきましては、この後委員の皆様からご意見をいただきたいと思っております。

荒井座長：資料2と資料3の説明がありましたが、用語等も含めて改めて確認したい点があれば質問を受け付けたいと思います。資料2に関しては、いかがでしょうか。（委員の様子を確認）よろしいでしょうか。

続きまして、資料3になります。こちらは、不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会で随時情報提供をさせていただいた学びの多様化学校についての意見集約に関する素案を出させていただいた形になります。ご質問はありますでしょうか。

三輪委員：1点伺いたいののですが、このまとめ自体は今回この懇談会での意見をまとめたということだと思うのですが、これをまとめることによって今後どのように使っていくのかということについて質問したいです。なぜ、そのようなことを聞くのかというと、この懇談会での検討結果についてのまとめということで、この7ページの表紙がスタートするのですが、実際にこの懇談会で意見交換はしましたが、何か論点を立て、論点整理しながら検討したという感覚は私自身にあまりなかったので、まとめということについてはどう考えたらよいのかということが一つあります。普通に考えれば、「学びの多様化学校の設置の意見交換のまとめ」でしたら、そうなのかと思うのですが、ということが一つ。

もし、その検討結果のまとめということを出したいという目的があれば、第1回の懇談会の時に県でこれについてワーキンググループを立ち上げて、それについての報告をしてもらい、意見交換をしたと思います。ワーキンググループが何回開かれたかわからないですが、検討結果のまとめであれば、まずワーキンググループで検討したものが全体としてあって、その意見聴取の場としてこの懇談会があったので、その意見交換の結果があって、3つ目として市町村の意向調査の結果があって、それらを踏まえて、今後の方向という全体としてはそのような構成の方が望ましいのではないかと思います。この懇談会に限ってあえて、検討結果のまとめとしたことについて意図を伺いたいと思います。

荒井座長：事務局から補足説明をしていただきたいと思います。夜間中学に関する検討会議とこちらの懇談会のご意見をミックスする形で、最終的には県の教育委員会が執行機関としての意思決定を行うという流れになると思います。

曾根原次長：年度当初の立ち上げでは、この学びの多様化学校も含めた不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会がスタートし、そして夜間中学の会議もスタートしました。そんな中議論をしていると、議論の内容が重なってまいりました。特に、夜間中学は、戦後の混乱の中で学べなかった人だけではなく、ニーズとしては色々な子どもが学べるようなものが望ましいという話をしていくと、まるで学びの多様化学校の話をしているような内容にもなってきました。

それを受けて、教育委員会内でも、別々に会議しているのではなく、それぞれお互いの内容を深めて統一したものとして捉えて、県として今後の方向も考えていかなければならないという結論になって今日に至ってます。今日まとめていただいた意見のまとめと、もうすぐ夜間中学の会議もありますので、両方を受けて、県としてはこういう方向でやっていきたいというものを考え、お示しできればと考えています。そんな経緯で進んできています。

荒井座長：ありがとうございます。なお、来週に、夜間中学の検討会議の最終回があります。三輪委員からご提案いただいた点と関わって、今のまとめの中に他のものを入れ込む形となりますと、拡散してしまう可能性もありますので、少なくともこの懇談会で提供された情報の中のご意見はどのようなものであったのかという内容になっています。この点、三輪委員としてはいかがでしょうか。

三輪委員：全体とどのようにつながるかということさえ整理されていけばよいと思いますが、第1回懇談会で話があったワーキンググループが動いているということがありました。第1回で示されたワーキンググループのまとめが、かなりしっかり出来上がっていたものですから、それも多分そちらで一緒に集約されてくるのだろうと思っています。

そうしましたら、表題等少し工夫していただくか何かで、懇談会としての今年度の意見交換のまとめということで、議論を進めればよいと思います。

荒井座長：ありがとうございます。他にご質問はいかがでしょうか。（委員の様子の確認）よろしいでしょうか。

では、11 ページ目をご覧ください。本日改めてご意見をいただきたい部分が（3）の議論のまとめと（4）の今後の方向性になります。3点ほど「・」を用意させていただいております。

1つ目は、この懇談会のメンバーの皆様のご意見をまとめたところになりますが、不登校児童生徒等の学びの選択肢が広がる、こういった形の学びの多様化学校の県内設置を積極的に検討すべきではないかというものです。

もう一つは、設置を前提とした場合、国や県の教職員配置や施設整備等の支援メニューをきちんと市町村に提示し、また、教育課程の編成に関しても互いにコミュニケーションをとって、設置検討の意向をもっている市町村を県としてきちんとバックアップしていく必要が

あるというものです。

そして3つ目ですが、アンケート結果からもありましたが、夜間中学と学びの多様化学校の併設というような、社会的な自立を目指し、不登校児童生徒の学びが保障され、インクルーシブでフレキシブルな学びの場を創造していくという観点が記載されています。ご意見等いかがでしょうか。

三輪委員：大きなまとめとしては、こういったまとめなのだと思うのですが、細かいことなのですが、この(3)については、この懇談会としての意見のまとめですので、荒井座長が今おっしゃったように、例えば1つ目の点、この「設置を検討する」で区切られてしまうと検討するのは誰ですかという話になってしまい、主語が誰なのかはわからないので、普通に考えれば「検討すべきである」とか、あるいは「検討を進めることが大切である」とか、そのような文末にした方がよいと思います。これは多分3点目についても同じことだと思います。「創造の検討を進める必要がある」ということだと思います。

2点目ですが、これについても同じことではあるのですが、この設置をするのが市町村ということが前提になっていると思うのですが、市町村はもちろん設置者になり得ますが県も設置者になり得るということから考えると、例えばこの設置を検討する市町村をバックアップしていくというだけで良いのかどうかということをおもいます。

例えば、最後のところと言えば「市町村や県が設置を検討するにあたり制度設計を整理する必要がある」とおもう。つまり、今回のことは結構広域に渡っていくので、例えば市町村が単独で設置した場合にはその周辺の市町村は委託によってやるのか、さすがに学校組合を作るところまでの大掛かりでは作れないので、そういう形になる場合もありますし、むしろ県として広域に設置していくとか、あるいは県と市町村が共同で設置するとか、色々な形態が考えられると思います。ですから、今後の議論にそうしたことも含みをもたせた2番目の文末にした方がよいと思っています。

荒井座長：ありがとうございます。確かにこの文言では主語は何かが判断し難い部分がありますので、三輪委員がおっしゃられたように、例えば少なくとも1つ目と3番目に関しては、県はこういったことをすべきであるという形のニュアンスを検討すべきかもしれません。2点目に関して、事務局ではいかがでしょうか。

事務局：心の支援課長の召田です。今、三輪先生がおっしゃられたこと、その通りだと思いますので細かい文言については今後検討させていただくにしろ、荒井座長もおっしゃったように、主語として委員の皆さんからの意見のまとめというような形で捉えていただければよいと思います。こちらの意図としては、1ポツ目と2ポツ目は、その設置主体を市町村に限ったわけではなく、2ポツ目は市町村をバックアップということを中心にしたかったからという形で作らせていただいたところです。またご意見をお願いします。

荒井座長：これまでの意見交換会やデータから市町村教育委員会が単独で自前でやることは厳しいという前提認識をする必要があるということで、県としては最大限バックアップしていくことの重要性を指摘するというニュアンスとなります。

近藤委員：どうするかということ非常に迷っているのですが、市町村としてはすべきということになると市町村で単独とはとても言い切れないということは今お話があった通りなので、そのように少し変えていただきたいということがございます。

この懇談会は継続支援に関する懇談会ということで、設置とかそういうことの段階ではなかったということからすると、議論のまとめのこの「・」の順番を入れ替えた方がよいのではないかと思います。つまり、一番下の夜間中学と多様化学校を含めて社会的な自立を目指し不登校児童生徒の学びが保障されるインクルーシブでフレキシブルな学びの場を創造するため、今後この継続支援をどうしていくかということがまとめの一番芯になるのではないかと思います。

それに伴って、学びの多様化学校の県内設置等についても今後検討していくとか、そういう方がよいのではないかと思います。そうすると、その次の4番のところも順番が逆になってくると思います。そういうことに関して、この集まった皆さんの一番話し合った論点はここでまとめていただいておりますが、荒井先生もNHKでおっしゃった通り、インクルーシブでフレキシブルな多様な学びの場、今ある学校も含めて、そういう場をどう作って子どもたちの学習支援を継続していくのか、そのためにはこういう情報を出された子どもたちへのコミュニケーションが必要だという発想のような気が私はしていたのですが、いかがでしょうか。

市川委員：今の近藤委員の話も本当にそうだなと最後の部分すごく思っています。荒井先生があ番組で出されたフリップもすごくよかったとっていて、ウェルビーイングを目指して、長野県として一人一人のウェルビーイングが、他の学校も10ページにもあるように、既存の学校も本来学びの多様化学校の精神に基づいてやっていくということが究極の目標だと思うので、そちらに対する、おそらく今後の方向性の3番がそうだと思うのですが、もっと明確に既存の学校に対しても、例えば学校にとって誰もがポジティブなものになることを目指すので学校への波及効果についても今後検討していくというようなことを入れていくことは可能かどうか。今後の方向性ということで、そういうことを希望、期待しています。

赤羽委員：私もこの懇談会の設置の趣旨ということ考えた時には、学びを支援していくところも非常に大事な部分だということは思っておりますので、先程近藤委員や三輪委員からお話がありましたように、最初はその学びの場を創造するというところを大事にしながら、文末ももう少し柔らかくしていく方がよいのではないかと思います。

これが、諮問を受けた審議会とかであると、ある程度答申という形で大分踏み込んだ書き方が必要になると思うのですが、あくまでも子どもたちの学びをいかに継続していくのかということを中心に考えていくという色々な関係者が集まって子どもの学びを大事にしようということ議論する、そういった意見交換をする場だということ考えた時に、もう少し柔らかめが欲しいなということを思います。

次に、先程市町村をバックアップするというようなお話もありまして、県も全面的にというようにお話もあったわけですが、実際に設置者の市町村の立場とすると、設置の環境作りはどうするか、それから学びの多様化学校であるので教育課程をどうやって編成するか等様々なものがあるわけで、そのところもきちんと一緒に考えてこういうことの議論が必要

だというようなことも踏まえていかないと、希望しているから県は支援すると言われても、具体的に何を支援していただけるのかとかというところが大事になるので、あくまで私たちが言えることは大切に考えていきたいというような文末にとどまるのではないかと思います。

岩田委員：やはり私はずっと一貫して学びの多様化学校を作っていただきたいというお話をしているのですが、先程来ありました学校への波及効果もとても期待しています。このアンケートの結果を踏まえると、この数を皆さんがどうお考えになるかわからないですが、70市町村の回答があったうちの「多様なニーズを包括した柔軟な学校について考えたい」と言ったのは8市町村で、これをもう少したくさんになるような、県でも支援策を市町村に対して、こうやって子どもたちが学ぶということの意味をもう少しきちんと説明していただいた上で、この数字がもっと上がるようなことをできるだけ早く実現していただければ一番ありがたいと思います。その上で、まずは始めてみるというところをぜひ早急をお願いしたいところです。

直井委員：私の中でコミュニケーションシートの議論と学びの多様化学校の議論がずっと混ざってしまっていたところがあるので、まとめにふさわしいのかどうかは少しわからないのですが、少し素人目線で単純にこの文言を見ると、また一方的な学校運営というか、せっかくコミュニケーションシートの議論はどうやって子どもたちとの関係を作るのか、そこから意見をどう吸い上げるかということだったと思うのですが、そこを吸い上げるというようなことも必要ではないかといった言葉も何か一言あると、このまとめの中で設置されるというところに向かうにしても、どういう学びの場が必要かという議論に実際に不登校を経験した子どもたちの声を反映させるというのはやはり必要なことではないかと思うので、その言葉や議論の扱いが私も少しわからないのですが、割とそこら辺は大事なことなのではなかったかと、全体のざっくりとした印象としてもちました。

近藤委員：ご質問に答えるというか、市町村教育委員会連絡協議会ではそういうことも話題になっておりまして、先日の会議で特別支援の学級の在り方とか不登校のお子さんたちの学びをどう保障していくかということについては、長野県内の市町村の教育委員会も関心をもっておられて少しずつ深まってきているのではないかと思います。

また、さらにこの間、県で行われた総合教育会議等でもございましたように、どういう学びがよいのかということが、今後、保護者の皆さん、それから学校等で共有し合って今の学校制度の中で、インクルーシブでできるだけフレキシブルな学校作りを進めていこうという機運が高まってきているのではないかと思いますので、これが出るとさらにそれが広まっていくのだらうと思っています。

さらに、このシートが出てそういう方々に広まっていくと、先程荒井座長がおっしゃったように順次広まっていくという形がこれでようやく取れるようになってきたのではないかと思いますので、少し期待をしているところでございますので、このまとめの仕方は先程から出ているような、まず不登校児童生徒の学びの継続支援をどうするのかということの視点のところから進めていくと誤解が解けるのではないかと思います。

三輪委員：今後の方向については、県の教育委員会が定めていくのですが、議論のまとめとして、今話を伺いながらも少し角度付けたことまで踏み込んでまとめてもよいと少し思ったのでお話ししたいと思います。

このインクルーシブでフレキシブルな学びの場の創造をしていく必要があるという、全体としてはこういうことなのですが、このまとめ自体が、学びの多様化学校の在り方ということでまとめていきますので、このインクルーシブでフレキシブルな学びの場について、学びの多様化学校という角度からどう考えていくのか、今までも意見が出てますのでそれを整理した方がよいかと思います。

4点程あるのですが、まず1点目は、この学びの多様化学校の在り方という視点という大きなものをもう少し噛み砕いて言ったらどんな言葉になるのかと思うのですが、これまでも例えば円卓会議ですとか色々なところで話題になってはいますが、1つは一人一人の子どもの自分のペースややり方が尊重され、多様な学びが保障される学校。2つ目は、この学びにアクセスできない子どもがいるということも問題になってきましたので、学びにアクセスできない子どもをゼロにする、あるいはオンライン等も活用していく学校。3つ目とすれば、今回のツールもそうなのですが、学校や教育支援センター、あるいはフリースクールとネットワークの核となる学校。そのような学びの多様化学校の在り方みたいなものをできるだけ委員の皆さんの意見を整理して載せてもらって、まとめていただく。そのことは、来年度の県の事業で一人一人に合った学びの実践校をやっていくという話なのですが、中を変えていくのも一つなのですが、外にそういう学校を作って、そこから学校への波及効果を狙っていくというやり方もあると思って、そのための学びの多様化学校の在り方というものを一旦整理した方がよいのではと、今思っています。

2点目とすると、そう考えた時に、対象となる児童生徒は誰なのか。不登校特例校という中では、不登校ということですが、「学びの多様化」でしたら、そちらを選んだ子どもはそちらを選ぶという可能性がある。そうすると、基本的には、すべての児童生徒が対象というようになるのではないかと思います。ただ、その際に問題になるのは、教育課程の特例が認められるかという整理が必要になってくるので、そこはまた県として整理する必要があると思うのですが、対象となる児童生徒は誰なのかという点。

3点目とすると、先程赤羽委員も心配されていましたが、例えば教員の配置基準ですとか施設の設置基準あたりを、どう考えればよいか、県として整理する必要があると思っています。例えば、学校設置型でやる場合、それから分校型の場合、それから分教室型の場合と、いくつか形態があると思うのですが、それぞれにどんな教員の配置基準があるのか、あるいは施設整備基準はあるのか、その辺が必要だと思っています。

4点目とすると、県としてバックアップするというものの具体を意見として伝えておきたいのですが、一つは色々な教育課程編成が既に全国でありますので教育課程編成の事例集を作ってもらふこと、ワーキンググループでも示されてはいましたが設置に向けたスケジュールの例、県としての財政的な支援、またこれはどう考えればよいのかと思うのですが、教職員のマインドセットのための研修。最後にもう一つあえて言えば、その出口の問題、不登校特例校と言われていた時代から学びの多様化学校となって、そこで学んだ子どもたちが卒業して高校入試になった時に取り扱いはどうなるのか。奈良県の大和郡山市のように、そこで独自に調査書等も作るというやり方もありますし、高校入試の在り方も含めてこの辺の整理が

必要です。そういったことも含めて、県教育委員会の支援を少し整理して、もう少しこの議論のまとめとして書き込めるものがあれば書き込んでいただきたいということを、少し時間をいただきお話ししました。

荒井委員：ありがとうございました。座長の私としては、本日含めて数回の懇談会できちんと議論していない点についてまとめとして公表していくのは無理があると考えています。

従いまして、今提起していただいた論点は、次の段階にある意思決定の場できちんと共有していただくものとして受け止める必要がある類のものだと感じています。

「インクルーシブ」で「フレキシブル」という私が以前使ったフレーズが一人歩きしていて恐縮ではありますが、この「インクルーシブさ」と「フレキシブルさ」は、新しい学校だけではなく、既存の学校においても大切にしていけるべきコンセプトである点については、皆さん、共感的に受け止めていただいているのではないかと考えています。従って、今後インクルーシブでフレキシブルな学校を新たに創造していく場合は、どのような学習環境が適切かという問いに対しては、直井委員がおっしゃっていただいたような当事者の意見を踏まえた学校運営という観点も当然必要になってくると思います。

また、学校関係者としての赤羽委員のお立場からすると、具体的なカリキュラムの在り方がポイントになるということかと思っています。さらに、甘利委員のお立場からすると、その学校を卒業した場合の扱い、通学の方法、費用負担などの観点からのご意見も頂戴できればと思います。岩田委員や市川委員から学びの多様化学校に対する期待感や課題についてお考えをお聞きしたいです。

甘利委員：建物もとても必要です。通える場所も必要なのですが、適した人材がとても必要で重要だと思っています。

なぜなら、やはりどなたでもできる仕事ではないと思っています。フリースクールだったり、教育支援センターであったり、その先生がいてくれるから、子どもは安心して行けるのです。そこにいる友達であったり、一歩二歩先に行ったお兄さん、お姉さん、第三者の家族以外のお父さんの、お母さんの存在、おじいちゃん・おばあちゃんの存在、そういった方がいてくださるからこそ通える、そして、母親、保護者も安心して、あの先生がいる、あの人がいてくれるからこの子を預けられる、安心できる場所がやはり確保されることは、とても重要なことだと思っています。

そして、親からすると費用面がとても心配です。学校内の校内教育支援センターでしたら費用はかからないのかもしれませんが、やはり少し離れた場所の教育委支援センターであったりフリースクールであったりすると通学費がかかります。そこに行くことによって費用が発生するというのはやはり保護者にとってはとても大きな負担になります。そのあたり、公的費用の負担がぜひ可能であれば、そういったところの話し合いを進めていただけたらと思っています。

荒井座長：ありがとうございました。保護者のお立場から、いわゆる経済的な負担の軽減ということについても考慮すべきだというご意見として重要と思います。

近藤委員：大変難しいし、私の立場でもなかなか言いにくいところがあるのですが、今の甘利さんのご意見もお聞きしたりして、やはり、この間荒井先生が出席されたNHKも、やはり今の学校制度そのものについても、どうあったらよいのかそろそろみんなで問い直していく時期になってきているのだらうと感じています。

手始めとして、先程三輪委員がおっしゃったように、外部に一つ作って、そこから中の学校へ影響を与えていくという考え方もございますし、今ある学校の中で教員の資質をどれだけ向上して変えていくかという点も出てくるでしょうし、そうしますと、例えば今の教職員研修の在り方そのものを変えていかななくてはいけないと思います。私は、長野県でやっている一斉授業の在り方について、これが典型的な授業だというのはそろそろやめて、もっと個別最適化の指導ということを求めていったらどうかというようなことも、校長会と話したりはしているのですが、そういうことも含めながら、まずは、やはり一番今、学校というか学びとつながらないお子さんを、とにかくできるだけ早く接触、つながり、絆をもてる、そういう場を早いうちに作ってほしいということが一番願っているところです。

荒井座長：ありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

市川委員：先程の荒井座長の話で、学びにアクセスできない子どもをなくすという点で、不登校の数とフリースクールに行っている数というのに相当な開きがある現状、その間にいる子どもたちというのがどうなっているのかというところが非常に心配で、我々もみんなと連携して、アウトリーチというか、そういうところで接触したくても、どこに誰がいるかすらわからない。そういうところについては、やはり学校が一番情報をもっているはずだと思っております。学校は、学校には来ていない、だけどフリースクールには行っていないということも知っている。

しかし、残念なことにその子どもや保護者は学校に対してネガティブな思いをもっているから、手も足も出ないような状態がある中で、それと違うものというものが、我々を含めてものすごい階層があって、規模も色々なものがあってというところで、学びの多様化学校というのは、その大きな一つ、先程甘利委員がおっしゃったような経済的な部分についても、多分無償で行けるようなものになっていくだろうし、そういうところと、我々みたいところは、有償だけど少ない人数で、本当もっと小規模に色々努力をもってできるということが、それぞれ連携して、事例を紹介し合ってどういう風にしていけばよいかというようなことの仕組み作りをやっていくことと、やはりそこには学校が情報源としてはものすごく有効なので、その自覚をみんなもってもらって、そうやって学校に来ていない子どもたちをどこにどうやってつないでいくかという仕組みのセンターとして、学びの多様化学校ができればよいとすごく期待しています。

荒井座長：ありがとうございました。学びにアクセスできない子どもをゼロにするということは、本当は公立学校の一丁目一番地であるべきです。その意味では、公教育制度の敗北です。直井委員、いかがでしょうか。

直井委員：学びにアクセスできない子どもたちという言葉が本当にあって、先程の荒井先生のインク

ルーシブでフレキシブルな学びの場とは、本当になんなのだろうと色々今考えながらお話を聞いてたのですが、学校とか、教育というくくりだけではもう語れないというか、私たちがやっていることも映画館ですし、もう学校を超えてしまっている場で子どもたちを受け入れているということを思うと、もう少し行政であるなら福祉課とか、文科省とかそれだけではない連携がないと、実際福祉課からつながってくる子とか、そういう子どもたちの情報を本当にどうやって情報提供していくかとか、地域で本当にその体制をどう作るかということだと思うのですが、そういう視点で学校を開いていかないと、教育委員会だけとか、県教育委員会自体も色々な担当があると思うので、市町村になった時も同様に、色々なセッターの人が入っているべきだというのは思いました。

あともう一個は、やはり子どもの意見をどう取り入れるかということは、すごくずっと関心があることで、子どもの権利条例とか、子どもの権利に立ち返るということを教育の中でどう位置付けられたらよいのか、私も詳しくはないのですが、やはりその視点が足りないなというのは、色々街づくりの視点でも思うところなのですが、そこがやはり入るべきではないかというのをすごく思いました。

荒井座長：ありがとうございました。

赤羽委員：色々なお話を伺って色々考えさせられました。やはり改めて思うことは、学びの多様化学校設置はどうかということをお話して、意見交換をさせていただいたのですが、設置するかしないかということだけでなく、学校の設置ということを通しながら、やはり一人一人の子どもを大事にしようとか、学びにアクセスしていない子どもがいないようにみんなで考えようよとか、そこが一番の大きな根っこではないかということに改めて思いましたし、私もこの場に来させていただいて、学校関係者ではない皆さんとこうやって議論をし、意見交換をさせていただくということが非常に大事だということに改めて思った次第です。

ですので、うまく言えないのですが、このまとめの表題をまたこれから少し事務局の方で考えていただくかと思うのですが、このまとめがどこに提案されて、何のためにまとめているのかということ考えた時に、今後の方向性というところまで切り込むのがいいのか、もう議論のまとめというところに、先程色々出てきている私たちが大切にしたいことというようなことを踏み込んで書けるものは、書いていったところでも十分伝わるのではないかと今はそんな気持ちがしています。

荒井座長：追加でご意見等いかがでしょうか。

岩田委員：先程市川さんも言われていましたが、情報に関して、やはり必要な情報がどうやって必要な方に届くかということもすごく大事になってくると思います。今、学びにアクセスできない生徒さんがすごく多いです。ホームページだと色々なところを探してようやくたどり着きましたという方がたくさんいらっしゃいます。

そういう方たちの、まず学びにアクセスする前に、そういった情報、今困っている、この困り感をなんとか解決するための情報を、その解決するための情報もどこかでゲットできる、

その中核になるのも学校なんだと思います。学校と私たちフリースクールみたいなところ、それから支援されている方たちが、どんなネットワークをこの後築き上げていって、そういった、一人でも学びにアクセスできない生徒さんたちを、救っていくというのは大きいかもしれないのですが、つなげていくかというところがすごく大事になってくとも思っています。

荒井座長：情報にアクセスできないといった時の「情報」というのは、どういう種類がありますか。

岩田委員：例えば、今の不登校の状況だとすると、相談相手としてSSWという方たちのことを全然知らないとか、そういう言葉が学校と保護者との間で話をしていても全然出ないという話もよく聞きます。なので、そうすると学校も学校でもっているソースの中でお話をされる。保護者の方たちは、何もわからないところでお話されているので、結局お話をしても、何も進展性がない。そして外にもつながらないということをよく聞きます。

どういう種類の情報かという、そういういっぱい選択肢をもった人の存在だとかものの存在とかというのを明らかにしているものですかね。県とかでも色々なサイトを作ってくださいであるのですが、そこに不登校になったらここだとかというような感じのサイトがあまりなくて、子どもカフェという名前になっていたりとか、少し和らいだ感じになっていたりとか、そういうような発信の仕方とかもあるのかとは思っています。

三輪委員：まとめ方みたいな話をしたかもしれませんが、先程来話が出ているインクルーシブでフレキシブルな学びの場ということについて、委員それぞれのお考えがほとんど同じようなところでまとまりながら期待としてあるのだと思います。これはまとめてしまわないで、そのインクルーシブでフレキシブルな学びの場という今回意見が出たことを併記したらどうかと思います。

その中には、子どもの意見が尊重されて子どもが作っていく学校みたいなこともあったと思いますし、あるいは保護者負担等が必要ない、多分交通費が結構かかってくる可能性がある、そうしたことについての負担についても十分配慮されていることだとか、あるいは、今岩田委員からあったような、多様な専門家というか関わっていくのは教員だけではないという話だと思うので、そうした多様な、地域の方や企業の方等色々な専門家に関わっていけるような、そういう学びが保障されるような場所だとか、そうしたことを併記して、懇談会としてのまとめとしたらどうかということだと思います。

荒井座長：全体を通じて一言ずつ委員の方にコメントをいただき、私の方で最後まとめをさせていただいて、事務局にお戻しできたらと思っております。

甘利委員：コミュニケーションシートについて、事例を一つお話しさせていただきたいと思います。こちらで不登校に関する委員会があり、その委員会の中でこのコミュニケーションシートを提示させていただきました。私としては、よいものは早く使いたい、早く保護者の皆さんに知ってもらいたいという思いを込めて、市の教育委員会で話し合いをさせていただきました。実はなかなかうまく進まずに、そこに参加してくださったある中学校の校長先生がこれはよ

いものだから実際に作って、やってくさいました。A4用紙表裏で一枚です。

先日その校長先生に、結果はどうでしたかとお伺いしたところ、シートを使える職員と使えない職員が出たということです。使えた職員は、今まで不登校になっている保護者とその職員の関係性がとてもよい状態、どちらかというとフランクに色々な話ができる職員は保護者に対してシートのお話をスムーズにできた。だけれども、どうしてよいかかわからない先生にとってはなかなか使いづらい。どうして使いづらかったかという、給食費や費用について提示してしまうと、こちらから学校に来ないでと、登校を否定してしまうという思いを先生が感じてしまって、使うことができなかつたという意見があつたようです。

校長先生がおっしゃるには、言い出せる関係性にある職員にとってはとても有効だと、ただ本当にどうしてよいかかわからない、どこから手をつけてよいかかわからないという職員に対しても、いいきっかけづくりになる。やはり、「きっかけ」というところにキーワードがありました。なので、とても保護者としてはいいきっかけ作りになると思つています。

ただ、学校は敷居が高いです。保護者にしてみると、なかなかこれを言つてよいのかどうか、あれも言つてよいのか。悩んでいるが表現できない保護者には、とてもいいきっかけ作りになると思うので、このシートをぜひ4月から全市町村でスタートしていただきたいと強く願つています。

私として思うことは、やはり保護者、学校教職員の先生方が知つていただくこともとても必須だと思いますが、保護者がこういったものがあるということ、長野県の全保護者が知つておくべきだと思つています。先程もお守りとして持つているという意見もありましたが、そこだと思つています。

でも、今年度このシートができることによって、来年度救われる保護者がたくさんいることをとても嬉しく思つています。ワクワクしています。

直井委員：今回この会議に参加させていただいて、本当にありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。最後にコメントということで、本当にこれまでの議論も含めて、今言葉に立ち返つてみたんですけれど、学びの継続をどう支援していくかというところなのですが、私たちが普段関わつている子どもたちは、割ともう学びに対する拒否感が前提としてあつて、それも色々思うことはすごくたくさんあるのですが、今、学ぶ必要がどこにあるのかとか、学んだ先というか、経歴みたいな、学歴の先にある社会が今こんな状態であるということ、子どもたちは多分すごく敏感に察しているだけで、学ぶことの価値というか、そこを本当に、この場だけではなく社会全体がというか、日本がどうしていくのかというところなのだろうということ、を普段本当に思つています。

特に、映画で色々な話題を扱うので、世界の不条理だとか、生きていくことも答えの出ない問いみたいなことは日常に溢れていて、この映画という話題を通じて、色々な話ができるのですが、やはりこれまでの価値観が変化している時期にあるとか、後は、この場の在り方、こういうコミュニケーションシートができたといふことの提示は、大人とか社会が、大人たちも本気で変わろうとしているんだよということをやはり見せていくしかないというか、そういうことで子どもたちがはつとして、一緒にもう一回信頼してもよいかと思えるような世の中をどう作つていけるかということだと思つているので、制度とかそういうこととはすごく遠いところにあると私は思うのですが、でも、本当に個人個人のやり取りの中で大人の本気を見せ

ていくというか、そういうことに携わっていければよいということを改めて思いました。

でも前提として、やはり学ぶことの楽しさというものをもう一回取り戻したいと思っているので、それを私の今できる場でもやっていきたいと思っています。

岩田委員：今、直井委員が言われたように、学ぶことはとても楽しいと思いますし、人生を豊かにしてくれると思います。今、学びということが、また時代とともに問い直されている時なのだと思います。それぞれの皆さんが学びについてお考えがたくさんあると思いますが、それぞれ皆さんが考えることを皆さんで出し合って、提供し合って、先程来言われている、学校は敷居が高いということではなくて、みんな同じ、私たち、保護者の方、それから学校に行っていない、学びにアクセスできない子どもたちも、みんな平場に立って議論したり、こういうことがあって然るべきということがお話しできたりとか、そういった機会をもてるような状況を作り上げる。この先に関しても大人も子どもも一緒になって、そういったものを目指していくという、そんな場所だったりとか人だったりとかというところを、私たちは作っていかなければいけないのではないかとこの会議を通して考えさせていただきました。

赤羽委員：先程も申し上げましたが、この懇談会に参加させていただいて、色々な立場の方と意見交換ができたことが本当に良かったと思っています。学校に対するご意見も頂戴して、色々振り返るところがありました。私としては、今回作り上げられたコミュニケーションシートをやはり使っていくという土壌をいかに生み出すかというところが当初大事になると思います。

学校におりますと様々な機関から様々な情報が4月当初に下りてきまして、そういう中では受け止めきれない部分というのたくさんあります。そこで、色々なチャンネルで、例えば県が持っているチャンネルや市町村が持っているチャンネル、教育支援センターですとか教育事務所、それから今いる民間の施設の関係者の方というようなところで、色々なところのチャンネルから、草の根ではないですが、周知できるようなことをみんなで協力してやっていって、確実に子どもたち、または保護者の方に届けられるとよいと思いますし、学校の人間としてはこのシートの理解をさらに進めていく必要があるのではないかと考えています。

三輪委員：1年間皆さんの様々な意見を伺い、また色々な考えや現状等についても知ることができて、大変刺激を受けました。

そして、具体的にどう動くのかということが、教育委員会に求められていると思っています。例えば、昨年の「はばたき」で学習評価についてのまとめがありました。それに基づいて、教育委員会としてガイドラインを作って一歩踏み出したのですが、踏み出してみると課題があって、なかなかこういうところはうまくいかないとか、色々なことがあります。そういうことを共有しながら、じゃあどうするのかと考えていく、そういう段階が大事だと思っています。

コミュニケーションシートについても、これからスタートしていきますので、思わぬことが出てくるかもしれませんが、どうやったらこれが活用されるようになるのだろうかということを教育委員会としても考えながら進めていきたいと思っていますし、それが基礎自治体の教育委員会の役割かと思っています。

先日、諏訪市のすべての小中学校の担当職員と、諏訪地域のフリースクールの皆さんと、それから市の教育支援センター、そして福祉部の方と、みんなで懇談会を初めてやってみました。そして、お互い率直に色々な課題や思いみたいなものを語りました。そうしてみると、やはり若干立場が違っても、子どもにとってどうやったらよいのかということはみんな同じことを考えていますので、色々なアイデアや課題が出てきます。そうしたことを一つ一つ解決していきたいと思っています。

出された中には、例えば他の地域ではやっている地域もありますが、ガイドブックみたいなものを作れないかという話が出ました。いわゆる一般的なガイドブックに加えて、こんなフリースクールがあって、こんなことがあるというようなことをまとめたガイドブックができませんかという話もあり、次からそれについて議論していきます。あるいは学校と評価について連携するのに、なかなかツールが厄介だといった話があるので、少し共通したものができないかというような話もあります。具体的に一歩ずつ踏み込みながら、支援の実を高めていきたいと思っています。そういう面でも色々な方たちと連携して進めていきたいと思っていますので、引き続きまた皆さんよろしくをお願いします。

市川委員：1年間、本当にありがとうございました。私も皆さんと同じように大変刺激を受けて、色々と積極的に参加したいという気持ちにさせていただきました。

今皆さんがおっしゃっているように、色々な方、それから直井委員が再三おっしゃっているように、当事者である子どもを含め、三輪委員もおっしゃった、そういう色々な方が集まって率直に議論をするような場というのはすごい大事だと感じさせられたことが一点。

それからもう一点は、本当にこのコミュニケーションシートを作って終わりではなくて、これがどう活用されて、どういう問題点があったかということについては、継続して議論をするような場がぜひとも設けられたらよいと期待しています。

最後に学びの多様化学校が、全部の学校にその精神が波及することを願っております。

近藤委員：本当に1年間、ありがとうございました。様々な立場というか、考え、子どものことを考えた時に、多様な考え方があるということを改めて感じさせていただきました。

やはり制度というのは、かなり思い切ってやっていかないといけないと、時代の移り変わりの中で今までのことをそうあるべきだという形で進める、そういう時も必要なのですが、改めて問い直して、新しい仕組みあるいは考え方のもとで作っていかないといけない、特にそういう時代に来ているのだということを思いました。なかなか個々ではできないことですので、相当これがんばっていかないと、なかなか皆さんの思いが伝わっていかないのだろうと思います。

荒井座長：ありがとうございました。今回この懇談会は、不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会ということで、子どもの育ちと学びに対する大人の責任や役割を改めて考えていきたいという強い思いをもって臨んできたつもりです。これまで制度としては色々なものを分けてきたわけですが、今後混ぜることでどうなるのか、つながることでどうなるのかということを考えていくことが大切になってくると思っています。つながることによって新たな困り感が出てくることもあるかと思いますが、そこを避けていては最適解や納得解は導き出せ

ないのではないかと感じています。

この懇談会の学びの多様化学校と関わるまとめをさせていただきます。私たちとしては、学びにアクセスをできないという状況を非常に重く受け止めてまいりました。子どもの事実に立ち返って、子どもの当事者性、保護者の当事者性を大切にしてきたわけです。

そして、既存の学校も含めてインクルーシブでフレキシブルな学びの環境を創造していくことが重要であること、学びの多様化学校の設置は、現状を問い直したり、現状の在り方を改めて考えたりする一つのきっかけや起爆剤となり得ると捉えていけば、今後、設置に関しては、少なくとも次の点を踏まえておく必要があると考えています。

1つ目は、現在、同時並行的に夜間中学の設置検討会議も走っています。ここでの議論の対象もいわば学びにアクセスできなかった子ども、あるいは学びにアクセスできない学習者に対する学習権保障の在り方の議論をしていこうとしているわけですので、そこでの議論も踏まえて考えていく必要があるという点です。

2つ目は、市町村の現状も踏まえて、県が伴走していくことが求められています。新たな学びの場の設置に向けての市町村アンケートの結果で、設置の意向をおもちの市町村がありますので、協働的に検討を進めていくということが重要である、これが2つ目です。

そして3つ目は、当事者の思いや願いを踏まえて反映させていくことも考えながら、新たな学校像を協働的に創造していく必要があるという点です。

長時間、そしてオンラインという形でしたので、コミュニケーションが十分でなかった部分はあるかと思いますが、お付き合いいただきありがとうございました。

(終)